龍井葉二著

# 『猪俣津南雄
——戦略的思考の復権』

紹介者：中根　康裕

本書の著者は長年，労働組合ナショナルセンターである「総評」および「連合」本部で労働組合運動を担い，それを社会運動へ脱皮させようと尽力してきた。また実践と両輪で学生時代から「猪俣津南雄研究会」に加わり，「労農派」マルクス主義者・猪俣津南雄の研究を続けてきた。そのひた向きな在野の歩みが生み出したのが本書である。

最初に本書の副題であり本書全体を貫くカギとなる，著者の言う「猪俣の戦略的思考」について触れる。それは小手先の何者かではない。物事を《交互作用》において把握（緒言）するという唯物弁証法の核心を，分析の全てに貫こうとする思考のことである。著者は猪俣津南雄こそ，それをどこまでも追い求めた人物であるとする。

それを押さえた上で，本書が描く猪俣津南雄の理論の特質を具体的に見ていこう。紙幅の関係上，順を追って章別にではなく，紹介者が特に魅かれた点に絞る。

猪俣は，彼が呼吸している当代を「闘争の体系」である帝国主義が支配する世界としてつかむ。相争いながら民衆の抵抗には協調して敵対する，世界体系としての帝国主義認識である。その「一環」としてのみ日本帝国主義も正確に認識できる，彼はそう言う。それゆえ猪俣にとっては「世界革命」の一環（第４章）としての日本革命なのである。その中で彼がたどり着いた見地，それが「帝国主義に対する闘争との結合により，ひとまずブルジョア民主主義革命に闘争の高潮点をみいだす」という日本革命の戦略（第３章）である。

猪俣は言う，日本帝国主義一国だけを帝国主義世界体系から切り離して論じるのは根本的な誤りであり，帝国主義世界体系の一環として日本帝国主義を認識する時にのみ問題は正しくつかめるのだ，と。また翻って言う，日本革命は国際的な交互作用の中で，具体的には「支那革命」下の中国民衆と提携する中で「解放の日を早める」ことができる，と。

では猪俣は，当時実在していた，世界革命を標榜する国際共産党＝コミンテルン中央の見解に「忠実」に活動したか。答えは否だ。彼はどんな「権威」の見解に対しても自分の頭で考えた上で結論を出した。猪俣は，日本の地で革命運動を具体的に前進させるためには，各分野の運動を一つにした統一戦線としての「民衆戦線」がどうしても必要不可欠なこと，統一戦線の「推進力」となる人々の結合体である《イニシアティブ・グループ》をこの統一戦線の内部に「組織横断的」に創ること，そして「前衛」党はイニシアティブ・グループが牽引する統一戦線運動との交互作用の中で「結晶」し得ること，以上ひと言にして《横断左翼》論（第６・８章）を主張したのである。

著者によれば，猪俣の横断左翼論の運動組織理念は例えば「極東平和友の会」の結成へ結実し，さらに猪俣と行動を共にした高野実（後の

「総評」事務局長）によって戦後初期の「総評」へ引き継がれ，「地域ぐるみ」の運動組織論に発展（第８章）したのである。紹介者の直感では，この運動組織理念は現在の憲法９条をめぐる所謂「総がかり運動」にも引き継がれていると思われる。

さらに著者は言う，猪俣が析出した「本当の意味の先進分子」は現実に登場しているが故に，プロフィールも明確に描かれ得る――即ち「資本家も容易に手放せない基本的職工」であり，「社会再建という大業を準備し遂行する」者（第８章）である，と。また著者は言う，猪俣の著書『踏査報告 窮乏の農村』〔1934 年〕へ結実する農村実地調査（第９章）も，調査を通じて農民運動の展望を析出しているからこそ「貧農下層」に焦点を当て得る具体性を持つのだ，と。そこに著者は猪俣がアメリカ留学中（第 10 章）に体得した実証研究重視の姿勢を見る。猪俣は 20 世紀初頭のアメリカ「草の根」民主主義の精神を兼備したコミュニストなのであった。

以上，紹介者が特に魅かれた点に絞って本書の内容を紹介した。著者は，帝国主義世界体系の一環である日本帝国主義の分析と，国際労働運動の一翼たる日本での横断左翼運動の形成の追求，その両者を統一的に把握しようとする理論家として猪俣を捉える。さらに働く人々の生活現場に飛び込んで自分の頭で考え抜く中から現状分析を生み出そうと苦心する《実地主義》の理論家として猪俣を捉え返す。著者の筆致によって帝国主義世界体系と丸ごと対峙しながら市井の地底（じぞこ）に寄り添い，自分を突き詰める中から日本の地で暴虐の体系を転覆する契機を見つけようと苦闘する，猪俣津南雄が現代に蘇る。

本書を読み終えた時，紹介者は世上に流布されている「労農派の猪俣」なる見方がいかに皮相なものであるかを知った。思うに，紹介者の理解では，猪俣津南雄こそ戦前日本における《独立マルクス主義者》の高峰なのである。

ここで，本書を読んで紹介者が想起したことを一つだけ記したい。猪俣の帝国主義世界体系論と横断左翼論の運動組織理念は，ローザ・ルクセンブルクの思想と理論を継承しているように思えてならない。詳論できないがローザの『資本蓄積論』や『ドイツ社会民主党の危機』（所謂「ユニウスの小冊子」）における，どこまでも帝国主義を世界体系として捉え，国際労働者階級の自発性を瞳のように大切にする立場と通底するものを感じてならない。また猪俣は旧長岡藩の出身であり，権威に屈しない精神は，戊辰戦争で賊軍の巨魁とされながらも筋を通した彼の地の気風を受け継いでいるようにも思われた。

尚，本書では所謂「第一次共産党」結成と「再建」（第１・２章），「福本イズム」「山川イズム」の批判や「戦略論争」（第５・７章）についても詳述されており，「日本資本主義論争」にも言及されているが，割愛せざるを得ない。只，本書では具体的紹介が省略されているが，猪俣が「講座派」の中心的論者である山田盛太郎の『日本資本主義分析』について「補強工作」が必要であるとしつつも，日本帝国主義の基礎を「階級的見地」に立って分析するという「難事業」を「遂行」しつつあるほとんど「唯一の書物」（東京朝日新聞 1934 年３月 26 日号）であるという評価をしていたことだけは補足しておきたい。猪俣が所謂「講座派」対「労農派」という枠組みを超越していた証左だからである。

また本書の中で唯一点，賛同できない叙述がある。野呂栄太郎のことをコミンテルンの意のままに動く「官僚」的な「秀才」であり，その中で日本共産党委員長に登りつめたと述べている部分（第7章）である。しかし，戦前日本共産党の委員長になることは「登りつめる」類のものではないだろう。また野呂が己を持たぬ操り人形ならば，そういう人間が企画した『日本資本主義発達史講座』に三十数名からなる少壮研究者が結集することもないだろう。ゆえに，この点だけは紹介者は賛同できない。尚，著者は野呂の『日本資本主義発達史講座』「内容見本」論稿について1931年6月執筆としているが，1932年2月執筆とすることが正しいことを付記する。学説史的検討をする上で大きな違いをもたらすためである。

改めて，本書は今の日本の閉塞状況を打破したいと願い，模索する人々にぜひとも目を通して欲しい労作である。本書の芯棒は，著者がとりわけ困難な条件に置かれている人々と共に歩んできた生き様そのものであり，働き生きる一人一人の自発性への信頼と横断的な連帯の希求に，読んでいて胸が熱くなる。著者自身が「妄想」と断りながら述べた野呂に関する叙述を除き，猪俣津南雄の研究を通じて新自由主義と自己責任論が跋扈する日本の現状に対する抵抗線を模索する，含蓄に富む著作である。

著者の真摯な研究姿勢，行間から伝わってくる温かい人柄を含め，非常に多くのことを学ばせて頂いたことに深く感謝する。

〔追記〕本稿は草稿執筆後に畏友，朽木敏弘氏（郡山生活と健康を守る会会長）と幾多の論点にわたって共同討議を行い，その中で成稿した。ここに記して謝意を表する。無論，本紹介稿に有り得べき誤謬は全て紹介者の責に帰するものである。

（龍井葉二著『猪俣津南雄――戦略的思考の復権』同時代社，2023年8月，334頁，定価2,800円＋税）

（なかね・やすひろ　法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員）